

未征服地分配の言説

——レコンキスタから世界分割へ——

合 田 昌 史

【要約】 近世の二大海洋帝国スペインとポルトガルは「発見」されていなく非キリスト教世界を二国間で排他的に分配し領有する「世界分割」(分界)の言説を展開した。本稿はこの言説の起源と成立と展開を扱う。分界の起源のひとつは一二―一三世紀のレコンキスタにおける未征服地分配の諸条約と「回復」の理念にあるが、成立の直接の契機は両国がアフリカとアメリカへ進出する一五世紀後半にある。回復の限界を超えた進出を第三国向けに正当化するために「発見」の理念と教皇の「贈与」勅書が拠り所とされ、両国間で利害調整が行われた結果、仮想の分界線が引かれた。成立当初の分界は東西へ漸進するふたつのフロンティアを意味していたが、マゼランの大航海を契機に、世界の二等分割の解釈が両国間で共有されるようになり、アジアにおける対蹠分界線の在処が議論された。占有主義の第三国を排除する未征服地分配の言説は近世を通じて保持された。

史林 九〇巻一号 二〇〇七年一月

一 国境の川で世界分割を考える

国境の由来は国家の領域形成と不可分であるが、あらまほしき領域と現実のそれとの落差から国境に関するさまざまな言説が編み出された。フランス史家D・ノルマン(一九八六年)によると、一六世紀から一八世紀にかけてフロンティアール(frondière)は防衛の前線を、リミット(limite)は国王の支配の及ぶ地帯を意味していた。ひとつの国家によって

「侵略」のフロンティエールが漸進すると、他国との交渉によって「和平」のリミットが設定された。ところが、一八世紀末から二つの用語はしだいに混交し始めて差異を失い、一九世紀半ばから「自然国境」説が流布するようになった。と。フランスの自然国境とされた山河のうち、ピレネー山脈におけるスペインとの国境は早期に安定した。その一因はピレネーのフロンティエールが二国間のものというよりは、むしろ中世キリスト教ヨーロッパの辺境として働き圧力を南に分散させていたことにある。九八年世代の作家アソリンは、スペインのもうひとつの自然国境はアトラス山脈にあると述べて、二〇世紀初頭のモロッコ分割を正当化した。アソリンの認識の根底にあるのは「陽の沈まぬ帝国」の喪失とその代償である。近世の辺境はジブラルタル海峡どころか三つの大洋をこえて延伸し、希有の境界概念を生んだ。スペインは辺境の同胞ポルトガルとともに始めてグローバルな分割線を構想したのである。

英語デマルケイション Demarcation は現代の新聞記事や研究書のタイトル等において国境の画定を意味する用語として定着しているが、その語源であるカステイリヤ語のデマルカシオン Demarcación、ポルトガル語のデマルカサン Demarcação は「世界分割」を意味していた。一六世紀スペインの年代記家フランシスコ・ロベス・デ・ゴマラは、一五二四年四月スペイン・ポルトガル両王権の代表者たちが国境付近に集って世界分割を議論したある会合に関連して、次のような逸話を伝えている。

ポルトガル人たちはある日「国境を流れる」グアデアナ川の畔を散策していた。その時ある少年が母親の洗濯した衣類をみていた。少年は彼らにこう問いかけた。皇帝陛下「カール五世」と世界を分割しようというのはおじさんたちかい、と。彼らがそうだがと答えると、少年はシャツをまくり彼らに尻を見せてこう言った。「それならほら、ここの真ん中に線をひいてみなよ。」この話は「国境の町」バダホスでも分割を議論する人々が集う会場でも評判になり大いにのわらいの種になった。^④

この会合、すなわちバダホス＝エルヴァス会議で議論された分界（世界分割）は、一四九四年六月七日のトルデシヤス条約において表現された言説である。^⑤この条約でスペイン・ポルトガル両国は西アフリカ・ヴェルデ岬諸島の西三七〇

レグアの海上に仮想の子午線を引いた。分界の子午線から東はポルトガル、西はスペインと非キリスト教世界における「発見」と征服の領域が、あらかじめ分配されたのである。一五〇〇年カブラルによって「発見」されたブラジルが同条約に遡ってポルトガル領とされた経緯はよく知られている。

この奇妙な取り決めは、近世の二大海洋帝国およびこれに挑戦したヨーロッパの第三国において多くの議論を呼び起こし、ヨーロッパ外の地図にまでその痕跡を残した。オスマン帝国の提督ピリ・レイスの海図断片（一五二三年、トプカプ・サライ博物館所蔵^⑥）には分界の知識が盛り込まれている。

分界が非キリスト教世界の権利を無視したものであることは明白であるが、ヨーロッパに限定しても二国間の条約に第三国を拘束する力はない。国際的な拘束力を求めるとすれば、それはトルデシヤス条約締結の前後に両国がそれぞれ教皇庁から引き出し積み重ねてきた教皇勅書の權威以外にない。だが、宗教改革の時代にあつてその權威は先細りの運命にあり、分界が早晩第三国からのきびしい挑戦を受けることは必定であつた。なかでもスペイン国王カルロス一世（皇帝カール五世）と厳しく対峙したフランス国王フランソワ一世（一五四一年）は次のような言葉で分界を否認した。

太陽は他者と同様に我にも暖を与え賜う。アダムがいったいどのようにして世界を分割したというのか。その遺言をこの目で見たいものだ。^⑦

国境の少年に象徴される当該国人の嘲笑やヨーロッパの第三国による指弾を受けながらも、分界の取り決めは一七五〇年のマドリッド条約によって破棄されるまで、「発見」や「先占」などと並んで非西洋世界の征服と支配を正当化する言説として機能し続けた。本稿の目的は分界がどのような起源を持ち、またどのように展開されたのかについて概観することである。

① Daniel Nordman, "Des limites d'Etat aux frontières nationales", Pierre Nora, ed., *Les lieux de mémoire*, 2, Paris, 1986, 50-59.

② ただし、史家 P・サーリンスは、国境画定の過程を (A) 領土の政治的配分 (allocation) (B) 条約文における境界の設定 (delimitation) として

(C)地上の境界線の画定 (demarcation) の三段階に分け、ピレネー

とし、引用箇所は筆者の訳。

条約は最初の(A)段階にすぎず、(B)や(C)の過程は12世紀以上を要した、とさつる。Peter Sahlin, *Boundaries: the making of France and Spain in the Pyrenees*, Berkeley, L. A., 1989, 2.

⑤ L. Adso da Fonseca & J. M. Ruiz Asencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Tordesillas*, [Lisboa], 1995, 151-167.

③ Azorin (Angel Cruz Rueda), *Obras Completas*, III, Madrid, 1947, 1231.

⑦ 一五四一年一月二十七日付カルロス宛トレド板機卿の書簡より。

④ F. López de Gomara, *Historia general de las Indias*, I, BAE, Madrid, 1946, 220. 清水盛男訳『広がりゆく視圖』1130~1131頁。た

H.P. Biggar, *A collection of documents relating to Jacques Cartier and the sieur de Roberval*, Ottawa, 1930, 190.

二 フロントニアの先にある国境——分界の起源をめぐって

1 レコンキスタ

通説上、世界分割の理念は一四五四年発布の教皇勅書から一四七九年のアルカソヴァス条約を経てトルデシリヤス条約に至るまでの四〇年間に形成された、と考えられている。しかし、史家フリオ・バルデオ・バルケ（一九七三年）は、分界は再征服運動^{レコンキスタ}に起源する、と考えている。すなわち、キリスト教徒によるアル・アンダルス^{レコンキスタ}の再征服・北アフリカへの侵攻・大西洋への膨張は「ひとつの現象の三つの局面」であり、トルデシリヤス条約における世界分割の思想は一二世紀半ばに遡る、と。^①

事実、一二世紀半ば以降のイベリア半島では将来の征服をあてこんであらかじめムスリム支配下の土地に線引きをしてその土地に対する権利を分けあうという内容の条約がたびたび締結された。「皇帝」を名乗るカステイリヤ・レオン国王アルフォンソ七世は、一一五一年一月二十七日のトゥデリエン条約でバレンシア・デニア・ムルシアを含む未征服の東部をバルセロナ伯ラモン・ベレンゲール四世に与え、残るムスリム支配地を自領とした。^②一一五七年アルフォンソ七世が死

去カステイリーヤ・レオン王国が再分裂すると、翌五八年五月三日カステイリーヤ国王サンチヨ三世とレオン国王フエルナンド二世はサアグン条約を結び、ムスリム支配地とポルトガルに分割線を引いた。一一七九年三月二〇日のカソラ条約ではムルシアはカステイリーヤ国王アルフォンソ八世に割り当てられ、アラゴン国王アルフォンソ二世はバレンシア・デニア・ビアル・ハティバ・カルベの征服権を確保した。加えてナバラ王国の分割も取り決められた。^⑤

一二四〇年代、レコンキスタは大詰めを迎えた。以後、一四世紀初頭にかけてキリスト教諸国間で境界の画定作業が進行する。カステイリーヤ国王フェルナンド三世とアラゴン国王ハイメ一世は一二四四年三月二六日にアルミスラ条約を結び、フカル川とカプリエル川の合流点からビアルを経てアルテアとピリヤホヨサの間の沿岸に至る境界線を引いた。^④ 一二九一年一月二九日のモンテアグド条約では北アフリカにまで将来の分割の触手が伸びた。ムルヤ川から東のアルジェリアとチュニスをアラゴン国王ハイメ二世が、西へ大西洋岸までのマウリタニアをカステイリーヤ国王サンチヨ四世が征服することとされた。^⑤ さらに、ハイメ二世はカステイリーヤ国王フェルナンド四世と一二三〇八年一月一八日アルカラ・デ・エナレス条約を結び、アルメリアを含むグラナダ王国の約六分の一をアラゴンの征服予定領域として得た。^⑥

以上の二国間諸条約のなかで北アフリカを射程に入れたモンテアグド条約は異色に見えるが、九世紀末以降に成立した国土回復の神話^⑦には北アフリカ分配を正当化する言説が内包されていた。その言説によると、西ゴート王国はイベリア半島と北アフリカのマウリタニアを統合したローマ帝国のヒスパニア管区に相当する「ヒスパニア王国」^{モナルキヤ・ヒスパニア}であり、西ゴート王国の継承者であるアストゥーリアス・レオン・カステイリーヤの諸王国はかつてのヒスパニア王国の領土を回復する権利を有する。モンテアグド条約における境界線はローマ時代の両マウリタニア、すなわち「マウリタニア・ティンジタナ」と「マウリタニア・カエサリエンシス」を分かつものであった。^⑧

この新ゴート主義の言説を補強したのが「西方十字軍」の理念である。教皇ウルバヌス二世（在位一〇八八―九九年）とパスカリス二世（在位一〇九九―一一一八年）は、スペインのキリスト教徒たちはその力をイベリア半島における対ムスリ

ム戦に傾注せよ、と説き、トレドなどの教会あるいは教区の「回復」^{レスタウレ}、「解放」^{リクタル}といった言葉を用いて国土回復運動を鼓舞した。^⑩

注目すべきは、国土回復運動の三強の一角ポルトガルが一二〜一四世紀におけるカステイリヤ・アラゴンによる未征服地の分配に与っていなかったことである。カステイリヤとポルトガルの間ではじめて文書によって境界の線引きが行われたのは、ポルトガルがレコンキスタを完了させてから二〇年近く経った一二六七年二月一六日、バダホスにおいてである。バダホス条約の国境はグアディアナ川を河口からカイア川との分岐点までたどり、そこからカイア川に沿ってバレンシア・デ・アルカンタラとマルヴァンの間に至る。ポルトガル国王デニスは、フェルナンド四世治下のカステイリヤ・レオンの政治的混乱に乗じて、一二九七年九月一二日アルカニセス条約を締結し、リバ・コアの帰属などポルトガルに有利な条件で国境線が修正された。だが、六年前のカステイリヤ・アラゴンのモンテアグド条約に類する未征服地分配の取り決めは盛り込まれていない。大航海時代の前夜、一三七三〜七四年カステイリヤとポルトガルの間には諸条約が締結されたが、やはりジブラルタルの彼方は分割の対象とされなかった。^⑪

したがって、一五世紀のアフリカ西岸と大西洋諸島におけるポルトガルの進出は、北アフリカを分配したカステイリヤ・アラゴンの利害に反するとともに、後二者が拠り所とする回復の理念の限界を浮き彫りにすることになる。分界の起源をレコンキスタの分配条約に求めるフリオ・バルデオン・バルケの見方は長期的展望として正しいが、それは起源のひとつに過ぎない。回復の限界の外で「発見」される未征服領域の分配においては、その領域の征服を正当化し第三国の介入を牽制する別の論拠が必要である。それが教皇勅書という国際法であった。一三世紀半ばのレコンキスタ完了から地中海帝国へ針路を定めていたアラゴンは別として、カステイリヤとポルトガルの軋轢と利害調整が教皇庁を巻き込んで、未征服地分配の言説を新しい段階へと導く契機となるのである。

アヴィス朝ポルトガル王国は、一四一一年カステイリヤと和約を結んで後憂を除き、一四一五年八月二〇〇隻の大艦隊でジブラルタルの対岸に位置する交易拠点セウタを陥落せしめた。教皇マルティヌス五世は大航海時代の鎗矢とされるこのセウタ攻略を十字軍として追認した。^⑬大西洋諸島にも触手が伸びた。一四一八年以降マデイラ諸島、アソールス諸島、ヴェルデ岬諸島の順にポルトガル人によって植民が開始された。以上の三諸島については領有権をめぐる厳しい議論は生じていない。^⑭

軋轢が激しなかったのは古来より「幸福諸島」として知られていたカナリア諸島である。ジェノヴァ人ランサローテ・マロチェッロは一三二二年頃カナリア諸島を再発見した。本格的な植民につながるのは一五世紀初頭からである。カステイリヤ国王エンリケ三世の支援を得たノルマンディーの騎士ジャン・ド・ベタンクールは一四〇二―〇五年カナリア七島のうち三島を征服した。その領有権は一四一八年一月ベタンクールからニエブラ伯へ、さらに一四三〇年三月ニエブラ伯からギレン・デ・ラス・カサスへと売却された。ポルトガルのエンリケ王子は父王ジョアン一世の死（一四三三年八月）後、カステイリヤ国王フアン二世に対してカナリア諸島の征服権を懇請したが拒否されたため、教皇庁に願い出た。教皇エウゲニウス四世はいったん「異教徒の」カナリア諸島をポルトガル国王に与える、と述べたが、カステイリヤがこれに強く抗議したため、一四三六年七月三十一日の勅書 *Dudum cum ad nos* において、フアン二世寄りに足場を移した。^⑮

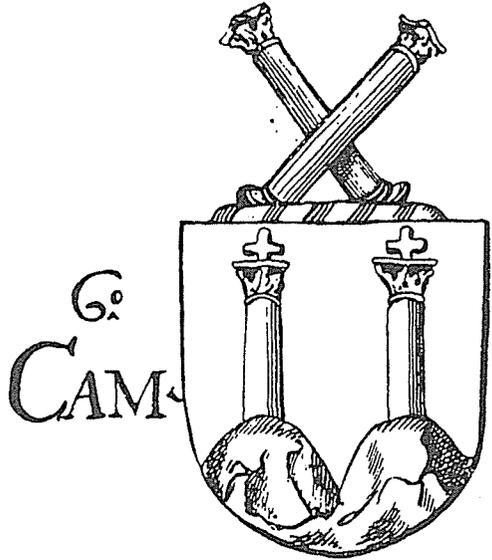
カステイリヤは教皇庁の意向を懸念しながらも、回復をめぐる教皇の権限に関しては否定的であった。レコンキスタの分配条約にローマ教皇の裁可が与えられていなかったことに留意したい。カステイリヤ国王アルフォンソ十一世（在位一三二二―一五〇年）は、西ゴートの継承者として西ゴートの支配下にあったという「ティンギタニア」（モロッコ）とカナリア諸島の領有権を主張し、「異教徒」の支配者がキリスト教宣教師の立ち入りを拒むことがない限り、ローマ教皇にそ

の土地を取り扱う権原はない、と述べた。^⑩その論点の基調は教皇エウゲニウス四世を翻意させた『ブルゴス司教ドン・アルフォンソ・デ・カルタヘナ師がバジレイラ「パーゼル」教会会議においてポルトガル人に抗してカナリア諸島の征服について行った申し立て（一四三五年）』でも変わっていない。^⑪

回復の理念による限り、カナリア諸島をめぐる綱引きでポルトガルの不利は否めない。しかし、以上の経緯においてすでにその理念の及ばない状況があらわれている。北西アフリカから沿岸部を南下する過程で出会ったのは、レコンキスタの対敵「モーロ」（マウリタニアの住人を指す「マウリ」に由来し、^⑫イベリア半島に進入してきたベルベル人やアラブ人などのイスラム教徒とその子孫たちを意味した）だけではない。非ムスリムの「異教徒」^⑬も少なからず居住していたし、一部の大西洋諸島は「発見」されたばかりである。回復と発見の境界はどこにあったのか。金七紀男（二〇〇四年）は、セウタ攻略以後に再発見されたマデイラ諸島とアゾレス諸島は、カナリア諸島やナン岬まで続く地中海世界の範囲内にあり、その限界は難所とされたボジヤドル岬にあった、とみている。^⑭

だが、踏査の実態と地理的認識において画期となったのは、さらに南方の大河セネガルへの到達である。ポルトガルの王室年代記家アズラの『ギネー発見征服誌（一四五三年頃）』と一四五五年エンリケ王子のもとで西アフリカへ航海したヴェネツィア人カダモストの記録によると、セネガル川はナイル川の支流であり、そこから黒人の地ギネーあるいはエチオピアが始まる。^⑮アズラによると、一四四二年、エンリケ王子はアンタン・ゴンサルヴェスをギネーへ派遣するにあたって、インディアスと司祭ヨハンネスの国について知りたい、と述べた。^⑯この発言の背景にあるのは、伝説のキリスト教国の探索先が一四世紀半ばまでに中央アジアからエチオピアに移されていたこと、そしてエチオピアを広範な複数形の「インディアス」の一部とするマルコ・ポーロ以来の見方である。^⑰

十五世紀半ば、ポルトガルは回復の限界を越えインディアスに近づいたと認識していた。教皇ニコラウス五世は勅書 *Romanus pontifex*（一四五四年一月八日付）をポルトガル国王アフォンソ五世に与え、「ボジヤドル岬・ナン岬から先のギ



【図1】 デイオゴ・カンの紋章
Francisco Coelho, *Tesouro de Nobreza, Livro de Armaria*, (1575).

ネー全域およびそこを越えて南端に至るまでの陸地」の征服・領有と通商・航海・漁業の権利はポルトガル国王アフォンソ五世とその後継者およびエンリケ親王に帰属すると宣言した。さらに、教皇カリストゥス三世は勅書 *Littera caetera* (一四五六年三月一三日付) を発し前勅書を確認したうえで、ギネーから「インドに至るまでの」すべての島嶼の精神的統治権と聖職叙任権をエンリケ王子のキリスト騎士団に与えた^②。ローマ教皇は、キリスト教の神からペテロを経て歴代教皇へ流れる「全世界を支配する者」として、キリスト教ヨーロッパにとつて未踏の「発見」されていない土地や回復の理念が及ばない土地の征服権を特定の君公に「贈与」できる、という認識を示したのである^③。

分界の直接の起源はこのふたつの教皇勅書とそれらを二国間の交渉によつて一部修正したアルカソヴァス条約にある。一四七九年九月四日アルカソヴァスで調印された条約の第八条によると、カナリア諸島をカトリック両王(カステイリヤ女王イサベルとアラゴン国王フェルナンド)のスペインが、その他の大西洋諸島と「カナリア諸島から下へギネアに向けて」すでに発見されたか、これから発見される土地と島嶼はポルトガルが確保した^④。

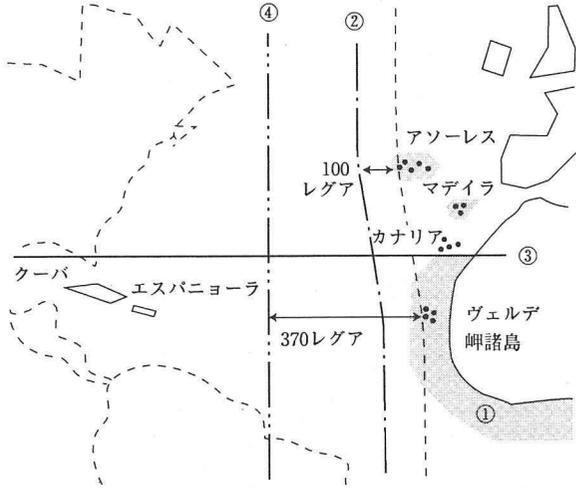
ポルトガル国王ジョアン二世は、このアルカソヴァス条約の追認と先行勅書類の確認のために教皇シクストゥス四世から勅書 *Aeterni regis* (一四八一年六月二日付) を引き出すと、目標をインドに設定し、デイオゴ・カンの二回の航海(一四八二―八四年、八五―八七年)でアフリカ西岸の踏査を加速させた。カンが航海の報奨として国王から授かった紋章には

四本の柱が描かれている「図1」。十字架のついた下の二本はカンがコンゴ川の河口部に建てた「サン・ジョルジェの石柱碑」を模っているが、上の倒れかけた二本の柱は「ヘラクレスの柱」である。ポルトガルの年代記家ジョアン・デ・パロス（一五五五年）は、かつて世界の果てを画したヘラクレスの柱がポルトガル国王の発見の石柱碑によつて乗り越えられた、と誇らしげに述べている。一四八七―八八年、バルトロメウ・ディアスは喜望峰を回航してついにインド洋に乗り入れパドローネ岬に発見の石柱碑を建てた。この時点でポルトガルは未征服地分配において圧倒的優位をえていた。この状況に一石を投じ分界成立の次の局面を開いたのはコロンブスである。

3 教皇分界とトルデシリャス条約

コロンブスは第一回航海の帰路「荒天のためやむなく」アゾレス諸島を経由して一四九三年三月四日にリスボンに帰着。三月九日にリスボン郊外ヴァル・ド・パラインでポルトガル国王ジョアン二世と会見した。『航海日誌』によると、ジョアン二世はカトリック両王と自分との間で結ばれた「協定によれば、このたびの「コロンブスによる」征服「の領域」は自分に帰属すると認識していると述べた。提督「コロンブス」はそのような協定は目にしたことがない」と応えた。②③ ジョアン二世が言及した協定はアルカソヴアス条約を指すと考えられている。

カトリック両王は好機と見て教皇庁に働きかけた。一四九三年五月九月、教皇アレクサンデル六世はスペイン（カステイルリヤ）に向けて五通の勅書を発布した。史家ガルシア・ガリョ（一九五八年）は、アレクサンデル六世の勅書五通のうち最初の三通はそれ以前にポルトガルに与えられた教皇勅書三通をモデルとしていた、とみている。すなわちポルトガルに与えられた Romanus pontifex（一四五四年一月八日付）は「贈与」の勅書、Inter caetera（一四五六年三月十三日付）は「特権」の勅書、Aeterni regis（一四八一年六月二日付）は分界の勅書としての性格を持つ。これに対応してスペインに与えられた一四九三年五月三日付の Inter caetera が「贈与」の勅書、同五月三日付の Eximiae devotionis が「特権」の



- ① アルカソヴァス条約のポルトガル領 (1479年9月4日)
- ② 教皇勅書の分界線 (1493年5月4日)
- ③ ジョアン二世の提案 (1493年8月14日)
- ④ トルデシリャス条約の分界線 (1494年6月7日)

〔図2〕 デマルカシオン設定の経過

勅書、五月四日付の *Inter caetera* が分界の勅書としての性格を持つ、と。^{②)}

発見と征服の権原に関してスペインは一回の航海でポルトガルに追いついたのである。アソーレス諸島とヴェルデ岬諸島を結ぶ線(ただし両諸島は同一子午線上に位置しない)から西一〇〇レグアの大洋上に分界の子午線が引かれ、スペインはその「西および南」側の領域を獲得した。教皇分界線の設定にコロンブスが関与した可能性は高い。^{③)} これを不満とするジョアン二世は、八月一四日カトリック両王に覚え書きを提出し、アルカソヴァス条約を盾にとって東西軸の分界を主張した。カナリア諸島の緯度で東西に分界線を引き、南をポルトガルの、北をスペインの領分としよう、と。カトリック両王は一四九三年一月三日付の書簡において、

これを拒否した。^{④)} しかし、その後も両国は交渉を継続し、トルデシリャス条約において起点をヴェルデ岬諸島のみとしたうえで南北軸の分界線をさらに西に二七〇レグア移動することで同意に達した。ヘロニモ・デ・スリタの年代記によると、両王権は大洋を縦に等分割するというたてまえによって妥協をはかったのである(図2参照)。^{⑤)} トルデシリャス条約は一五〇六年一月二四日、教皇ユリウス二世の勅書 *Bullae Inter caetera* によって認可をうけた。

注意を要するのは、少なくともトルデシリャス条約締結の時点までの分界は非キリスト教世界の「二等分割」を意味す

るものではなかった、ということである。トルデシリヤス条約に分界の子午線は地球の反対側におよぶという条文はない。初期の分界はいわば仕切り直しのスタートラインであった。だが、この妥協は一見してスペインの譲歩である。事実、ブラジル獲得に引きつけて、現代ポルトガルの歴史教育・研究の世界には、トルデシリヤス条約を「ポルトガル外交の勝利」とみなす風潮が根強い。^{②4}なぜカトリック両王は教皇分界に固執しなかったたのであろうか。

スペイン史家トゥデラ・イ・ブエソ（一九七三年）は両国を合意に導いた背景として国際政治におけるアラゴンの立場およびイベリアの「同胞」としての意識をあげている。この時期のポルトガルとカステイリヤ（スペイン）王室は例外的に良好な関係を保持し、婚姻を密に重ねていた。加えて、深刻化の一途をたどるイタリア問題においてフランスの陣営にポルトガルを取り込まれまいとするアラゴン王フェルナンドの配慮が働いていた、というのである。^{②5}

トゥデラ・イ・ブエソの指摘は分界の枠組が維持された背景を考える上で重要である。第三国を排除し二国間のみで独占的に分配をはかることが分界の本義だからである。だが、そもそもトルデシリヤス条約をスペインの譲歩、ポルトガルの勝利とする見方は正しいのであろうか。未征服地分配の地政学的言説として分界をとらえた場合、トルデシリヤス条約締結から二〇年間ポルトガルはフロンティアの条件においてスペインに後れをとっていた、と私は考えている。その前提として分界の教皇勅書と二国間条約の関係を整理しておく。

通説によると、一五世紀半ばにポルトガルに与えられた勅書群の内容が一四七九年アルカソヴァス条約によって修正されたのと同様に、スペインに与えられたアレクサンデル勅書群の内容はトルデシリヤス条約によって修正された。この時点で発見・征服予定領域の分界が成立した、と。^{②6}

だが、私見によると、両国はトルデシリヤス条約によってアレクサンデル勅書群を乗り越えたのではなく、それぞれが獲得した勅書類のうえに立ちつつ教皇分界線を移動させるという一点において妥協をはかったのであり、勅書類を比較照合すると、フロンティアの設定は一方的にスペイン有利となっていた。スペインにとって重要なのは、一四九三年九月二

六日付の勅書 *Dudum siguidem* である。この勅書は同年五月付で発布された他のアレクサンデル勅書群の内容を大きく一歩進め、西方への航海で「発見」される土地（および航海・交易・漁業）の権利はそれが「東方」であろうと「インド」に属そうともスペイン国王のものであると定め、さらにポルトガルに与えられた勅書を破棄して、すでにポルトガルによって「発見」された土地でも未だ実効的占有にいたっていない場合はスペイン国王にそれを支配する権限を付与している。ふたつのフロンティアは均衡していなかった。未征服地分配の大枠において優位に立っていたからこそ、スペインは分界線の移動に応じたのである。

フロンティアの不均衡が是正されるのは二〇年後である。ポルトガル国王マヌエルは一五二三年六月六日付の書簡で教皇レオ一〇世に馬拉ッカ占領（一五二一年）を報告し、翌年春恭順使節団を派遣した。レオ一〇世はこれに応えて勅書 *Præcelsæ devotiois*（一五二四年一月三日）を發布した。これはスペインが得た勅書 *Dudum siguidem* に対応するもので、ポルトガルは大西洋の分界線から東へ向けて無限の「発見」と「先占」の権利が与えられた。この時点でふたつのフロンティアの条件は対等となった。世界が球体であるからには（サクロボスコの『天球論』などの中世天文学のテキストにおいても『ミュンヘン手引き』などの一六世紀初頭の航海術書にも世界が球体であるという認識は記載されていた）^{③④}、漸進するフロンティアはいずれどこかでもうひとつのフロンティアとぶつかり、ふたつのフロンティアは同時に消滅する。消滅の地点は両者の「発見」と「先占」の速度しだいである。

以上の経緯で注目すべきは、トルデシリヤス条約に規定された線引きの実施が棚上げにされたことである。分界線は仮想の存在であった。モラトリアムの理由については、条文の不備と技術的難点を指摘する研究もあるが、当時の技術水準であつても両国間の政治的合意に基づいて執行することは充分可能であつたというラゲアルダ・トリアス（一九七五年）の見方が妥当であろう。十六世紀の両国で作成された地図類に分界線があらわれていることがその証拠のひとつである。^⑤

もちろん、分界線の位置づけは両国の利害を反映して多様である。しかし、M・ジユスト・ゲデス（一九九五年）は、

すでに一五一〇年代前半の両国は分界線がアマゾン河口の西とカナネアの二地点で南米沿岸と交差するという認識を共有していた、とみている。ゲデスが指摘する二地点のうちのひとつ、カナネアに関しては留保をつけなければならないが、デイオゴ・リベイロ諸図（一五二五～三年）にみられるように、アマゾン河口付近で分界線が赤道と交差する地図は少なくない。赤道で分界線が代替できるのであれば、境界のありかは判別しやすい。それでも線引きのモラトリウムが維持されたのは、十六世紀段階で南米の領有問題が先鋭化しておらず、むしろ地球の反対側の線引きが両国において焦眉の関心の的となっていたからである。しかも、その論議はたんに軋轢を意味したのではなく、排他的分配の枠組みを誇示するねらいを秘めていた。以下、「モルッカ問題」で係争中の両国間で、非キリスト教世界の二等分割を主張する新たな分界解釈が生まれ、それが近世を通じて共有された事実についてまとめておきたい。

- ① J. Valdeon Barque, "Las particiones medievales en los tratados de los reinos hispanicos", *El Tratado de Tordesillas y su proyeccion, Valladolid*, 1973, I, 21-32.
- ② P. Bofarull et al eds., *Coleccion de documentos ineditos del Archivo de la Corona de Aragon*, 4, Barcelona, 1849, 168-170, 239-241.
- ③ J. González, *El reina de Castilla en la época de Alfonso VIII*, Madrid, 1960, I, 814-816, II, 79-82, 528-532.
- ④ A.H. Miranda & M.D. Cabanes Pecourt, *Documentos de Jaime I de Aragon*, Valencia, 1976, 2, 176-177.
- ⑤ *Memorial Historico Espanol*, Real Academia de la Historia, Madrid, III, 1852, 456.
- ⑥ J.G. Gaztambide, *Historia de la bula de la cruzada en España*, Victoria, 1958, 205-231, 263-281.
- ⑦ P. Linehan, *History and the historians of medieval Spain*, Oxford, 1993, 103.
- ⑧ J.F. O'Callaghan, *Reconquest and Crusade in Medieval Spain*, Philadelphia, 2003, 4.
- ⑨ Rumeu de Armas, *El Tratado de Tordesillas*, Madrid, 1992, 19.
- ⑩ O'Callaghan, *Reconquest and Crusade in Medieval Spain*, 31-38.
- ⑪ D.J. Smith, "'Soli Hispani? Innocent III and Las Navas de Tolosa'", *Hispania Sacra*, 51, 1999, 500.
- ⑫ B.W. Diffie & G.D. Winius, *Foundations of the Portuguese Empire, 1415-1580*, Minneapolis, 1977, 59.
- ⑬ J.M. da Silva Marques, ed., *Descobrimientos Portugueses*, 3 vols., Lisboa, 1988 (1944-71), I, 244-248, 365-369.
- ⑭ D. Peres, *Historia dos descobrimentos portugueses*, Oporto, 2nd ed., 1960, 55-62, 73-92, 189-205.
- ⑮ A. Rumeu de Armas, *España en el Africa Atlantica*, I, Madrid, 1956, 54-63, 91-94; Perez Embid, *Los Descubrimientos en el Atlantico*, 125-130, Silva Marques, ed., *Descobrimientos Portugueses*, I,

- 351-352.
- ⑤ Peter Russell, *Prince Henry 'the Navigator', A Life*, New Haven, 2000, 162-163.
- ⑥ Silva Marques, ed., *Descobrimentos Portugueses*, I, 295-320.
- ⑦ O'Callaghan, *Reconquest and Crusade in Medieval Spain*, 16.
- ⑧ 今谷正徳, 『フナトリノ船乗り』——大航海時代の日本船乗り』(大航海時代の日本船乗り) 100回生 276頁。
- ⑨ Gomes Eanes da Zurara, *Crónica de Guiné*, cap. 60 (Barcelona, 1973, 286). ノズニト (東南夷記) 『キネー船乗り征服誌』 『西ノフリカ航海の記録』 大航海時代の探検 II 『岩波書店』 一九六七 三三三頁。
- ⑩ *Voyages de Luís de Cadamosto e de Pedro de Sintra*, Lisboa, 1988, 27. カマヂヌ (伝説英蘭記) 『航海の記録』 『西ノフリカ航海の記録』 五二六-二七頁。
- ⑪ Zurara, *Crónica de Guiné*, cap. 16(86). ノズニト (東南夷記) 『キネー船乗り征服誌』 一四四頁。
- ⑫ V.M. Godinho, *Mito e mercadoria, Utopia e pratica de navegar, seculos XIII-XVIII*, Lisboa, 1990, 153-179.
- ⑬ Fonseca & Ascencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Torde-sillas*, 54-57, 63-65.
- ⑭ 『大航海探検』 三巻の探検の記録は国中に領有権を認める国のみが注のふりをして記述している。R.I. Burns, ed., *Las Siete Partidas*, II, I, IX, Philadelphia, 2001, v. 2, 274.
- ⑮ Fonseca & Ascencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Torde-sillas*, 69-92.
- ⑯ *Ibid.*, 101-107.
- ⑰ W.G.L. Randles, *Geography, Cartography and Nautical Science in the Renaissance*, Aldershot, 2000, II, 15-16.
- ⑱ Rui de Pina, *Crónica de d'el rei D. João II*, cap. LXVI (A. Martins de Carvalho, ed., Coimbra, 1950, 184); Garcia de Resende, *Crónica de d'el rei D. João II*, cap. CLXV (G. Pereira, ed., Lisboa, 1902, III, 20-22); João de Barros, *Decadas da Asia*, I-III-XI (H. Cidade & M. Múrias, ed., Lisboa, 1945, 118-122).
- ⑲ Francesca Lardicci, ed., *Reperitorium Columbianum*, VI, *A Synoptic Edition of the Log of Columbus's First Voyage*, Turnhout, 1999, 425-426. 船乗り探検記 『探検の記録』 四二六 一四六三頁 一八一頁。
- ⑳ A. Garcia Gallo, "Las bulas de Alejandro VI y el ordenamiento jurídico de la expansion portuguesa y castellana en Africa e Indias", *Anuario de Historia del Derecho Español*, 27-28, 1957-58, 593-594; Fonseca & Ascencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Torde-sillas*, 119-130.
- ㉑ M. Gimenez Fernandez, "Nuevas consideraciones sobre la historia y el sentido de letras Alejandrinas de 1493 referentes a las Indias", *Anuario de Estudios Americanos*, I, 1944, 253-54.
- ㉒ Fonseca & Ascencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Torde-sillas*, 132-133, 139-141.
- ㉓ Jerónimo de Zurita, *Historia del rey don Hernando el Católico*, Zaragoza, 1610, lib. I, cap. XXIX, 35r-37r.
- ㉔ Manuel Filipe Canaveira, "O Tratado de Tordesillas na historiografia portuguesa e espanhola", *Oceanos*, 18, 1994, 78-84.
- ㉕ J. Perez de Tudela Bueso, "La armada de Vizcaya", *El Tratado de Tordesillas y su proyección*, I, 76-84.
- ㉖ J. Perez de Tudela, "Razon y Genesis del Tratado de Tordesillas", in: *Tratado de Tordesillas*, Madrid, 1985, 31.

- ③ Fonseca & Asencio, eds., *Corpus Documental de Tratado de Tordesillas*, 206-207.
- ④ L. de Albuquerque, *Os guias nauticos Manique e Évora*, Lisboa, 1965, 83-92.
- ⑤ R.A. Laguarda Trias, "Las longitudes geográficas de la membranza de Magallanes y del primer viaje de circumnavegación", A. T. da Mota, ed., *A Viagem de Fernão de Magalhães e a Questão das Molucas*, Lisboa, 1975, 138-39.
- ⑥ M. Justo Guedes, "O Descobrimento do Brasil e o Tratado de Tordesillas", in: *El Tratado de Tordesillas y su época*, Sociedad V Centenario del Tratado de Tordesillas, [Madrid], 3 vols., 1995, III, 1402-1404.

三 地球を山分けすること

1 対蹠分界の理念

ガマ以降のポルトガル人による「発見」事業の急速な進展はフロンティアの存在そのものを否定するもうひとつの分界解釈を惹起させた。それは、分界線は地球の反対側におよぶ「子午環」であってこの子午環によって非キリスト教世界はあらかじめスペインとポルトガルの間で二等分割されていた、とみなすものである。これを以後「対蹠分界」の解釈と呼ぶことにする。

対蹠分界観が公文書類において初めて表明されたのは、一五二二年三月二七日、アラゴン国王でカスティーリヤ摂政のフェルナンド二世がセビリア通商院付の航海士総監フアン・ディアス・デ・ソリスと結んだ（が実現しなかった）航海の協約においてである。協約とポルトガル公使ヴァスコネロスの報告（八月三〇日）によると、対蹠分界線はセイロン島を通っており、目的地のモルッカ諸島のみならずマラッカまでもカスティーリヤの分界内である、とソリスは確信していた。^①

当時のイベリア半島においてこのような対蹠分界観が共知として認識されていたことを例証するテキストがある。それは、スペイン人天学者者マルティン・フェルナンデス・デ・エンシソによるカスティーリヤ語の刊本『地理学大全（セビ

リア、一五一九年』、ポルトガル人神学者ペドロ・マルガリーヨによるラテン語の刊本『自然学摘要（サラマンカ、一五二〇年）』、ポルトガル人航海士アンドレ・ピレシユによるポルトガル語の手稿『海事書』の三著に共通してとりこまれている。そのなかで大西洋の分界線はマラニヨン「IIアマゾン」川と淡水の海「IIバリア湾」の間で南米と交差し、対蹠分界線はガシオン「IIガンジス」の河口を貫く。^②

このテキストはカナリア諸島から東にガンジス河口まで一五〇度とするプトレマイオス図の東西枠を踏襲したうえで、カナリア諸島と分界線の経度差を三〇度としている。また、地球の外周見積もりに直結する経度一度あたりの距離は一六レグア三分の二というバルトロメウ・ディアスら航海者に用いられていた数値を採用している。これは実値より一五パーセント過少の見積もりで、コロンブスの二四・五パーセント過少より大幅に改善されているが、やはり小さな地球観は保持されていた。^③

この地理観と対蹠分界の解釈は未征服のアジア分配においてスペインに有利である。中米地峡における黄金・真珠伝説およびバルボアによる「南海」の発見（一五二三年）と相まって、再びスペインに西回りアジア航路開設の機運がもたらされた。だが、二等分割の分界解釈はそれまでの二国間における公文書類において明記されていない。一五二二年モルツカ諸島に到達しアジアの「発見」と「先占」で優位に立つポルトガルは、前述のように一五一四年までにフロンティアの条件をスペインと対等なものとしていたのだから、外交的にこの解釈を拒否する余地はあつたはずである。二等分割の解釈を両国の合意事項とする流れをつくつたのはマゼラン隊の航海（一五一九―二三年）であつた。

2 マゼランの航海

ポルトガルの下級貴族フェルナン・デ・マゼラン（マガリヤンシユ）は一五〇五年以降インド領とモロッコで軍人として勤務したが厚遇されなかつたため、学者ルイ・ファレイロと語らつて企画を温め、数人の航海士を伴つて一五一七年一

〇一二月セビリアに移った。翌年三月二日マゼランとファレイロはスペイン国王カルロス一世と西回りで香料諸島をめぐり航海の協約を結んだ^④。彼らの背中を押したのは初めてモルッカ諸島に到達したフランシスコ・セラシコ・セラシコからの書簡であり、短期間で協約締結にこぎつけた背景には、フォンセカ司教やクリストバル・デ・アロラブルゴス派政商の根回しと財務的貢献があった。

航海の協約では分界の遵守が再三にわたって唱えられている。史家D・ラモス・ペレス（一九七五年）は、マゼランとファレイロは一五一二―一八一年に定着したスペイン有利の対蹠分界観に便乗した形で西回り航海の利点を説いた、と見ている^⑤。たしかに、国王秘書官マクシミリアーノ・トランシルバーノの書簡（一五三二年一〇月二四日）によると、マゼラン航海の前夜、シナの海湾やモルツカ諸島がスペインの分界内にあることは「きわめて確かなこととして認められ噂されていた」^⑥。

しかし、マゼランは必ずしもスペイン有利とは言い切れない地理観をもっていたため、状況に応じて非キリスト教世界の二等分割の分界解釈と東西へ漸進するふたつのフロンティア解釈とを使い分ける「分界のダブルスタンダード」をとらざるをえなかった、と私は考えている。以下、ファレイロ手引書の分析およびファレイロ排除の経緯、『マゼラン覚え書き』や航跡の分析などから、この仮説を検討する。

一五一九年五月八日の国王訓令では、「発見」地の地理座標（緯度と経度）を測定せよ、と命ぜられている^⑦。経度の測定は当時においてきわめて困難であったが、これが異例の共同総司令官に任ぜられた学者ファレイロの主たる役目であった。海軍史家A・テイシェイラ・ダ・モタ（一九八六年）は、インディアス文書館所蔵の一六世前半のカステイリャ語手稿「東西高度の算出法」がルイ・ファレイロによる経度測定のための手引書の写本ないし抜粋である、と推定した^⑧。手引書の中で天文学的手法より簡便な方法として推奨されているのは、「偏角経度法」である。これは「偏角」（羅針盤の針が指す地磁気の北極と地理上の北極のズレ）の変化が経度の変化に相応するという（誤った）仮説に基づいて、偏角を測定し船位の

経度を割り出す方法である。協約成立の頃、このファレイロの知識に大きな期待がかけられていたであろうことは想像に難くない。

だが、協約から一年数ヶ月を経た一五一九年夏までに状況が変わった。国王は七月一六日付の通商院宛の書簡で、ファレイロはマゼランの遠征に同行せず後続遠征隊を準備せよ、と命じた^⑨。共同総司令官ファレイロは「精神異常」の口実で解任されたのである。ブルゴス派による幹部人事の掌握といった政治的理由とは別に、ファレイロの手法への信頼が低下していたことにも起因していたであろう。ファレイロの手引書は事前に接收されていたが、航海士らはその運用を義務づけられておらず、技術面でファレイロの役目を引き継いだアンドレス・デ・サン・マルティンは、手引書の内容と天文表を修正したうえで、南米とフィリピンにおける計八回の経度測定をすべて天文学的方法で行っていたからである^⑩。

地理的認識においてもマゼランとファレイロの間には落差がある。ファレイロの手引書第二四節の末尾と第二六―二九節は、海峡通過後まもなく東アジア大半島と黄金半島が形成する「大湾」に入ることを示唆しており、広大な海洋の存在と航海の長期化はまったく想定していない^⑪が、一五一九年九月頃国王に提出された『マゼラン覚え書き』をみると、マゼランは東回りの喜望峰航路を経で三七度半も上回る長大な西回り航海を出帆前から覚悟していたことがわかる。その冒頭でマゼランは、ポルトガル国王がモルッカ諸島はその分界内であると主張するために航程を「短縮」するよう命じたかもしれない、という疑念を表明したうえで、以下のように六つの重要地点の地理的座標を分界線との関係で位置づけている。

ヴェルデ岬諸島西端のサント・アントニオ島（北緯一七度）から西へ三七〇レグア二二度に分界線。ブラジル東端のサント・アグスティン岬（南緯八度）は分界線から東へ二〇度。ブラジル沿岸における既知の限界点サンタ・マリア岬（南緯三五度）はサント・アントニオ島から西へ六度四分の一。喜望峰は分界線から東へ七五度で南緯三五度。喜望峰から東北東の針路で六〇〇レグアの航程の先、北緯一度にマラッカ。マラッカから東へ一七度半で対蹠分界線に至る。マルコ五島はいずれも赤道付近で、対蹠分界

線から東へ二度半〜四度の間にある。^⑬

モルツカ諸島はかろうじてスペイン分界内におかれているが、マラッカを取りこぼし、コロンブスが喧伝したアジアへ至る短い西回り航路の魅力を大きく削ぎ落とす内容となっている。その典拠は明らかではないが、ポルトガル人ペドロ・レイネルとその息子ジョルジュがセビリアで作成したと推測されている一五一九年頃の世界図、通称「クンストマンⅣ」（ミュンヘンのハウプトコンセルバトリウム・デア・アルメー所蔵、第二次大戦中に消失）^⑭はモルツカ諸島と対蹠分界線の位置関係について『マゼラン覚え書』と酷似している。

以下は分界のダブルスタンダードに関する私の推測である。マゼランとファレイロは対等のパートナーとして性格の異なる二種の知識を別々にプレゼンテーションの道具として用意していた。マゼランは経度より信頼性の高い緯度の知識と経験をもって具体的な地名とその産物を示し、ファレイロは経度の認識と偏角経度法を提示した。ところが、協約締結から出帆までのおよそ一年半の間のある時点で、マゼランはポルトガルの地図作製者たちとの接触から『マゼラン覚え書』に示されたような東西距離の積算による新たな分界認識を入手し、ファレイロ手引きの経度法と地理に疑念を覚えるに至った。協約締結後の変化は企画の信頼を損ねる懸念はあるが、それは経度担当のファレイロに責任を転嫁して切り捨て、ブルゴス派幹部の登用を許容することによって相殺された。ただし、経度測定がスペイン有利の対蹠分界観を突き崩す結果をもたらす危険性があるなら、対蹠分界の実験に過大な期待はかけられない。分界の本義「漸進するふたつのフロンティア」に即して未発見地への到達を優先させる必要があった。

以上の推測のうち、マゼランの緯度の知識と未発見地の優先を裏付けるために、フランシスコ・アルボの水路誌^⑮などによつて太平洋横断の航跡を再現しておく。マゼランはモルツカ諸島が赤道直下にあることを知りながら、また「まず何よりもさきにマルコ「モルツカ」諸島へ向かうべし」という国王訓令を受けていながら、三ヶ月あまりの太平洋横断中に北半球への迂回路を描き、北緯十二〜十三度の航路を維持した。加えて、マゼランが修訂したとされる地理書『ドウアル

【表1】 フランシスコ・アルボの水路誌にみる8地点と基準線の経度差

観測地点	ビルヘナス岬(海峡東端)	サン・ラサロ諸島の東端(スルアン)	ボルネイ(ブルネイ)	キビット	テレナテ(テルナテ)	モティル	プロ(ブル)	ティモール	
経度差	52 1/2	189	106 1/2	201 1/12	191 1/2	190 1/2	191 3/4	194	197 3/4
基準線・点	不明	不明経線	万聖海峡	分界線	不明経線	不明経線	不明経線	不明	不明

【表2】 ビガフェッタ伊語写本にみる12地点と分界線の経度差

	赤道通過点	泥棒諸島(タム)	ズルアン(スルアン)	マザナ(リマサワ)	スブ(セブ)	キビット	ブラオワン(パラワン)	ブルネ(ブルネイ)	タドール(ティドール)	バンダン	マルア(アロール)	ティモール
伊語写本	122	146	161	162	164	167	171 1/3	176 2/3	161	160 1/2	169 2/3	174 1/2

テ・バルボザの書』写本の分析、およびカンティノー図(一五〇二年)にアラビア人の緯度の単位イスバが盛り込まれていること、¹⁸⁾ポルトガル時代のマゼランがマラッカ滞在時に現地航海者から緯度のデータを接収していた可能性、「発見」地のフィリピン中部ビサヤ諸島で黄金が見いだされたときにマゼランが目的地に達したと発言したという乗員の証言を考慮に入れると、マゼランは伝説の黄金島「オフィール・タルシス」と中国南部へつながる「東洋針路」の要所にポルトガルに先んじて到達し「占有」の実績をあげようとしていた、と考えられる。

他方、対蹠分界の実験は問題をはらんでいた。アンドレス・デ・サン・マルティンによる経度測定の結果は、フランシスコ・アルボの水路誌とビガフェッタの航海記に記載があるが、両者の隔たりはあまりにも大きい。ビガフェッタによると、フィリピン・ビサヤ諸島のみならずブルネイ、ティモール、モルッカ諸島もまたスペインの分界内であるが、アルボによると、すべてポルトガルの分界に入る(「表1・2」。改竄の可能性が高いのは早期に刊行されて世に喧伝されたビガフェッタの航海記であろう。スペイン不利を示すアルボの記録は疎まれ、その水路誌は一九世紀まで出版されなかった。

したがって、「発見」されたビサヤ諸島でスペインがとるべきは非キリスト教世界二等分割の分界解釈ではなく、フロンティア漸進の分界解釈であった。教皇「贈与」を論拠とする投降勧告は開戦を正当化し、フロンティアとしての分界を漸進させる。恫喝をうけたセブ王らは服従を表明し集団改宗に応じた。だが、武威を過信した強圧

的な投降勧告の連採は反動を招き、一五二二年四月マゼランはマクタン島で戦死した。

残存スペイン隊二隻がモルッカ諸島にたどり着いたのは同年十一月である。トリニダード号は太平洋帰航路の発見をめざして失敗し、モルッカ諸島のポルトガル当局に捕獲された。この時没収されたアンドレス・デ・サン・マルティンの記録（所在不明）はバロスらによって閲覧され、のちの交渉に微妙な影響を残した。他方、セバスチャン・デル・カノ率いるもう一隻のビクトリア号はインド洋経由で一五二二年九月サンルーカル港に帰着した。コロンブス以来熱望されていたアジアへの西回り航路の開設がスペイン内外で強く印象づけられた。積み荷の香料はその大半が翌年一月アントウェルペンにおいて七八万八千六百四十四ラペディで売却され、艦隊の準備のため王室が支出した経費をあがなってあまりあった。^{②①}

モルッカ諸島テルナテ島においてマゼラン隊到来の翌年によく要塞を設営できたばかりのポルトガルにとつて、一回の航海で西回り航路を見いだし中国とモルッカ諸島をつなぐ航路の中間にスペインの足かがりをもたらしたマゼランの航海は重大な脅威であった。スペインのフロンティア漸進に歯止めをかけるために、排他的分配の言説、すなわち二等分割の分界観に則って交渉する必要があるが生じた。

3 バダホスⅡエルヴァス会議

カルロス一世は多角的なポスト・マゼランの航海を指示した。すなわち、一五二二年一月ラ・コルーニャに「香料通商院」を新設しマゼランの航路による後続遠征の準備に取りかかるとともに、長期の困難な航海を余儀なくさせるマゼラン海峡経由の航路とは別の西回り航路を中北米沿岸で探索させるため、一五二三年三月二十七日にマゼラン隊の航海士エステヴァン・ゴメシユ、六月一二日にエスパニョーラ島のルカス・バスケス・デ・アイリヨンと協約を結び、さらに六月二六日エルナン・コルテスに北米を迂回する航路を太平洋側から探索するよう命じた。^{②②}

だが、政治的調整の途は開かれていた。ポルトガル国王ジョアン三世がビクトリア号乗員の拘留とモルッカ諸島から持

ちだした香料の差し押さえを要求すると、カルロス一世は逆に、いまだ果たされていないトルデシリヤス条約の第三条項すなわち線引きの取り決めに遂行しようとして提案した。スペイン側はモルッカ諸島が自らの分界内であると主張できるとみていた。スペインの動きに危機を感じていたジョアン三世は一五二三年一一―一二月、線引きの実施ではなくその方法の審議を再提案し、対蹠分界の解釈を事実上容認した^②。両国は一五二四年二月一九日ビトリアで合意に達した。

両国はそれぞれ三名の天文学者と三名の航海士・航海者を任命し、分界によって所有の問題を裁定させる。さらに両国はそれぞれ三名の法曹家を任命し、モルッカ諸島の占有の問題を裁定させる。裁定者たちは三月末までに国境のパダホスエルヴァス間に集い五月末までに結審する。審議中はモルッカ諸島に遠征隊を派遣できない。分界の問題が解決する場合は、占有の問題は裁定がなされたものとする。占有の問題のみが裁定され、分界の問題が裁定できない場合は、本協約以前と同じ条件下にとどまる^③。

遠征の中断という高い代償を払ってまでも合意にこぎつけられたのは、両王室間の「同胞」意識を強めて排他的分配という分界の意義を再確認し第三国を牽制する必要が生じていたからである。それは「フランス初の官民一体」の海外遠征事業と評されるヴェラツァーノの航海（一五二三年末―二四年七月）である。フィレンツェ人ジョヴァンニ・ダ・ヴェラツァーノの航海はフランソワ一世およびディエップのジャン・アングの支援とリヨン在住のフィレンツェ人銀行家グループの出資をえておこなわれた。「カタイとアジアの東海岸に達する」ため北米沿岸が踏査された^④。この航海に関する警戒感にはスペインよりもポルトガルの方が強かった。ジョアン三世はノルマンディーで準備中の遠征隊は実はブラジル入植を目指しているとみていたからである。第三国の「占有」を排除するには、非キリスト教世界はあらかじめ二等分割されていたという認識を主張する必要があった。それゆえ、ビトリア協約は「占有」の審議と二等分割を前提とする「分界による所有」の審議とを分離したうえで後者を上位においた。

ただし、審議の取り組み方は二国間で差異が見られた。ジョアン三世は占有の審議に自信を持っていた。一五二三年八月頃に複数の関係者の証言で作成された『モルッカ問題供述調書』によってポルトガルのモルッカ諸島占有は論証できる、

と。^⑧この調書とモルツカ諸島諸王権のマレー語書簡類は一致して、テルナテ島の国王がポルトガル国王に臣従しその宗主権を認めたことを示している。他方、スペイン側の資料にはブレがあった。世に広まったアントニオ・ピガフェッタの報告はティドール島国王の「臣従」を記しているが、同じくマゼラン隊帰還者のマルティン・メンデスによる『マルコ諸島の諸国王と結ばれた和約と修好の記録（一五二一年九月三〇日～二月一七日）』^⑨はモルツカ諸王権との友好通商関係の確立を示すにとどまり、カルロス一世の宗主権を主張していない。

だが、四月一日に始まった占有の審議はポルトガルの目論み通りには進まなかった。両国の法曹家たちはともに原告となることを拒否したため、その議論は終始停滞していたのである。モルツカ諸島の主権者との法的取り決めは宗主権をえたポルトガルが優位であったが、問題はモルツカ諸島に統一的権力が存在せずテルナテとティドールが覇権を争っていたことにある。それぞれにポルトガルとスペインが加担していたため、一方との関係を基に申し立てをしても、他方との関係を根拠にそれは論破される。占有の審議は痛み分けて終わった。^⑩

分界による所有の審議については攻守が入れ替わっている。分界線の画定に積極的なスペイン側の持ち札は学的権威プトレマイオスの東西樑、ポルトガルから引き抜かれた航海者や地図作成家らの知識、そして世界周航を成し遂げ裁定者のひとりとして参加したデル・カノの情報である。ポルトガル側は、天文学者と航海者の権限を相対的に弱めてその議論を法曹家に統御させ、分界のための経度測定を実施が困難な手法に限定することによって審議を空転させようとしていた。^⑪

分界の審議は裁定者の人選や技術的細部の駆け引きで約六週間を費やし、進展が見られたのは最後の一週間である。両国からそれぞれ東回りと西回りで相互補完的にモルツカ諸島の位置づけに関する情報が地球儀で提示されるが、ズレが大きい。実に四六度もの経度差があった。そこでポルトガル側は天文学的手法の提唱によって局面の打開をはかった。この提案はスペイン側を刺激し、ポルトガル側のデータ改竄行為を「暴露」させた。すなわち、ポルトガルで前述のモルツカ問題の「調書」以外に対蹠分界に関する調査がなされたが、ポルトガルに不利な結論が出されたため「航程の短縮」によ

る地図の偽造が行われた、と。ポルトガル側は天文学的手法に固執し五月末会期はつきた。^②

この暴露をそのまま受け取るならば、スペイン側はポルトガル側の改竄されていないデータを境界の共知にすえようとはかり、ポルトガル側はそれを阻止しようとした、ということになる。しかしながら、暴露の図式は実はそれほど単純ではない。

審議のさなかにポルトガルの裁定者セケイラら三名は国王宛書簡(五月一日)で次のように述べた。三七〇レグア算定の起点をヴェルデ岬諸島の東端に定めると、海面上モルッカ諸島は一二〜一三レグアほどポルトガル境界内に入るが、ヴェルデ岬諸島の西端から算定するとモルッカ諸島はスペイン境界に五〇レグア入ったところに位置づけられる、と。^③後者の五〇レグアは経度で三度弱に相当する。これは『マゼラン覚え書き』の二度半〜四度という経度差にきわめて近く、モルッカ諸島はスペインの境界内に経度で五度ほど入るといふポルトガル人ドゥアルテ・パシエコ・ペレイラがスペイン大使に漏洩した認識(一五三三年二月四日)^④から遠くない。また、前者の一二〜一三レグアすなわち経度で一度弱という位置づけに近似したものを示しているのは、スペインから帰国したベドロ・レイネルによつてビクトリア号帰還の少し前に作成されたとされる南半球の投影図である。この図で対蹠分界線はモルッカ諸島のわずか二分の一度東で赤道と交わっている。^⑤したがつて、五月一日付書簡が示す数値はマゼランないしレイネル父子によつてスペインに流された情報と同一ないし同源であり、対蹠分界線とモルッカ諸島の位置づけに関する共知の核になっていた可能性が高い。

この共知を基準にすると、審議中に提出されたポルトガルの地球儀はモルッカまでの距離を二二〜二六度もポルトガル有利に歪曲している。しかし、スペインの地球儀もまた二〇〜二四度スペイン有利に歪曲した数値を示している。この数値はピガフェッタのものよりもさらに一〜五度ほど歪曲の幅が大きい。したがつて、スペイン側もポルトガル側とほぼ同等の改竄行為を弄していたことになる。なぜこれほどの歪曲が必要とされたのか。ポルトガル側が不利な情報を機密事項にしたいのは領けるが、スペイン側が対蹠分界線の東二度半〜四度というモルッカ諸島の位置づけをそのまま掲げないの

はなぜか。その理由として推測しておきたいのは、モルッカ諸島から西へマラッカまでの島嶼部およびモルッカ諸島から北ないし北西方向に中国までのびる東洋針路沿いの黄金諸島があるとおぼしき海域をスペイン圏内に確保したいという欲求である。のちにファン・ロペス・デ・ベラスコは『インディアス地誌総説（一五七四年）』のなかでフィリピンやモルッカを含む北緯四〇度―南緯一四度の東アジア・東南アジアの群島を「西方諸島」と名付け、すべてスペイン分界に位置づけた。^⑤ スペイン側の裁定者たちはマラッカとモルッカ諸島の経度差を二三度と見積もっていたが、歪曲の幅はほぼそれに相当する。マラッカ付近に対蹠分界線を刻んだ地図は少なくない。

しかし、スペインの戦略は一貫性を欠いており充分な成果をあげたとは言えない。「暴露」は切り札であったが、かえって自前の論拠が弱いことを露呈することになった。本来、ビクトリア号の詳細な記録が積極的に用いられてよいはずである。スペインはアンドレス・デ・サン・マルティンやフランシスコ・アルボによる世界周航の経度を黙殺し、ピガフェッタの記録を残したが、おそらくある時点で前者の記録がポルトガルに没収されたことを認識したため、後者を強く押し出すこともできなかつた。それゆえ傍証としてマルコ・ポーロやマンデヴィルといった時代遅れの典拠まで持ち出さざるをえなかつた。しかも、スペイン裁定者団の首位にあつたエルナンド・コロンは会合の舞台裏で対蹠分界の解釈を否定し分界の裁定は不可能であると断定していた。^⑥

4 モルッカ問題の収束

バダホスIIエルヴァス会議以後もモルッカ問題に関する両国の交渉は断続的に行われていたが、一五二五年七月二四日、カルロス一世はガルシア・デ・ロアイサを総司令官とする七隻の第二次モルッカ遠征隊をガリシアのラ・コルーニャから送り出した。これを含め一五六五年までに西回りでアジアに到達しようとしたスペイン艦隊はアングラシアないしガリシア発が六隊、アメリカ太平洋岸発が五隊、計一一隊である。^⑦

この動きはモルッカ諸島テルナテ要塞の維持に呻吟するポルトガル人に脅威を与えた。しかし、一五二八―二九年、太平洋帰航路の探索に二度失敗したことがスペイン側にとって痛手となった。一五二九年四月二二日、サラゴサ条約によってモルッカ諸島の東一七度に境界線が引かれ、カルロス一世は黄金三五万ドゥカードで自らが有すると信じるその権利をジョアン三世に売却した^④。

しかし、この場合の境界線はモルッカ諸島の帰属を決定したにすぎず、これによって対蹠分界線が画定されたわけではなかった。少なくともスペインはそう理解し、モルッカ諸島のほぼ真北に位置するサン・ラサロ（フィリピン）諸島における権益の確保をめざした^⑤。一五四二―四五年、メキシコ副王が派遣したルイ・ゴメス・デ・ビリャロボスの六隻の遠征隊によってレイテ―サマル群島に「フィリピナス」の名が与えられ、ミンダナオ島がはじめて周回された^⑥。この結果、「東洋針路」の要所に位置する貿易上および戦略上の利点は確認された。

両国はこれ以降も中国や日本、フィリピンなどの征服権をめぐる分界の議論を繰り返す。重要なのは、その議論がいかに加熱しようとも対蹠分界はヨーロッパの第三国を排除し独占的に非キリスト教世界を分配する「談合」の論理のうえに成り立っており、両国の交渉は決裂に至らないという事実である。

- ① J. Toribio Medina, *Juan Diaz de Solís. Estado Historico*, II, Santiago de Chile, 1897, 58-69; Centro de Estudios Históricos Ultramarinos, *As Gavetas da Torre do Tombo*, IV, Lisboa, 1964, 319-20.
- ② A. Cortesão, *Cartografia e cartógrafos portugueses dos séculos XV e XVI*, Lisboa, 1935, I, 75-80; Luis M. de Albuquerque, ed., *O Livro de Marinharia de André Pires*, Lisboa, 1963, 116-117, 222-223.
- ③ W.G.L. Randles, *Geography, Cartography and Nautical Science in the Renaissance*, IV, 48, IX, 11-13.
- ④ G. Arciniegas, et al., *La primera vuelta al mundo*, Madrid, 1998, 66-68.
- ⑤ D. Ramos Perez, "Magallanes en Valladolid: la capitulación", *A Viagem de Fernão de Magalhães*, 196-197.
- ⑥ D.C.S. Serrano, ed., *Obras de Navarrae*, 3 vols., Madrid, 1954-64, II, 560-561. 長南美訳「マヤノンの最初の世界回遊航海」一三二―一三八頁。
- ⑦ *Obras de Navarrete*, II, 515, 484.
- ⑧ A. Teixeira da Mota, *O Regimento da Altura de Leste-Oeste de Rui Faleiro*, Lisboa, 1986, 141-144.

- ⑥ Medina, *El Descubrimiento del Océano Pacífico*, Santiago de Chile, 1920, CLVIII.
- ⑦ Medina, *Colección de documentos inéditos para la Historia de Chile*, I, Santiago de Chile, 1888, 106.
- ⑧ R. A. Laguarda Trias, "Las longitudes geográficas", *A Viagem de Fernando de Magalhães*, 154-174.
- ⑨ A. T. da Mota, *O Regimento da Altura de Leste-Oeste de Rui Faleiro*, 140-141.
- ⑩ Copia. AGI, Patronato, 34, R. 13, 2; *Colección general de documentos relativos a las islas filipinas*, 5 vols., Barcelona: Compañía General de Tabacos de Filipinas, 1918-1923, II, 330-331.
- ⑪ A. Cortesão & A. T. da Mota, eds, *Portugaliae Monumenta Cartographica* (PMC), 6 vols., Lisboa, 1960, I, 37-38.
- ⑫ Copia. AGI, Patronato, 34, R. 5; *Colección general de documentos relativos a las islas filipinas*, III, 229-278.
- ⑬ G. Arciniegas, et al., *La primera vuelta al mundo*, 123.
- ⑭ *Colección general de documentos relativos a las islas filipinas*, III, 112-138.
- ⑮ A. Teixeira da Mota, "Méthodes de Navigation et Cartographie Nautique dans l'Océan Indien avant le XVIIe siècle", *Sindia*, 11, 1963, 76.
- ⑯ Neves Águas, ed., *Fernão de Magalhães a primeira viagem à volta do mundo*, Mem Martins 1986, 217.
- ⑰ Barros, *Ásia*, III, V, X (H. Cidade & M. Múrias, ed., Lisboa, 1945-46, III, 297).
- ⑱ J. Denucé, *Magellan, la question des Malouques et la première circumnavigation du globe*, Brussels, 1911, 362-363; Medina, *El Descubrimiento del Océano Pacífico*, CCCXXV.
- ⑲ J. T. Medina, *El Portugués Esteban Gómez al servicio de España*, Santiago, 1908, 35-111, 130-133; *Obras de Navarraie*, II, 102-107; Leon-Portilla, *Hernán Cortés y la Mar del Sur*, Madrid, 1985, 34-35.
- ⑳ *As Garetas da Torre do Tombo*, IV, 78, 257, 171.
- ㉑ *As Garetas da Torre do Tombo*, VIII, 595.
- ㉒ 一宮誠「解説」『トレンヌヌムメリカ大陸 一』大航海時代叢書第二期一九八二年、五三八頁
- ㉓ L. C. Wroth, *The Voyages of Giovanni da Verrazzano, 1524-1528*, New Haven & London, 1970, 57-70, 123-132; N. J. W. Thrower, "New Light on the 1524 Voyages of Verrazzano", *Terrae Incognitae*, XI, 1979, 59-65.
- ㉔ *Raccolta di Documenti e Studi Pubblicati dalla R. Commissione Colombiana*, Parte V, Volume II, 250.
- ㉕ *As Garetas da Torre do Tombo*, VIII, 171.
- ㉖ AGI, Indiferente general, Est. 1528, ff. 1r-17v.
- ㉗ *As Garetas da Torre do Tombo*, III, 533-534, 538-539, 559-561, 572-573.
- ㉘ *As Garetas da Torre do Tombo*, VIII, 225-6, 622; Albuquerque & Feijó, "Os pontos de vista de D. João III", 541-542.
- ㉙ *Obras de Navarraie*, II, 617-625, 630-633.
- ㉚ *As Garetas da Torre do Tombo*, IV, 312.
- ㉛ S. Subrahmanyam, *The Career and Legend of Vasco da Gama*, Cambridge, 1997, 302.
- ㉜ PMC, I, 39-41, est. 13.
- ㉝ Juan López de Velasco, *Geografía y descripción universal de las Indias desde el año 1571 al de 1574* (Madrid, 1894), 10, 569-581.

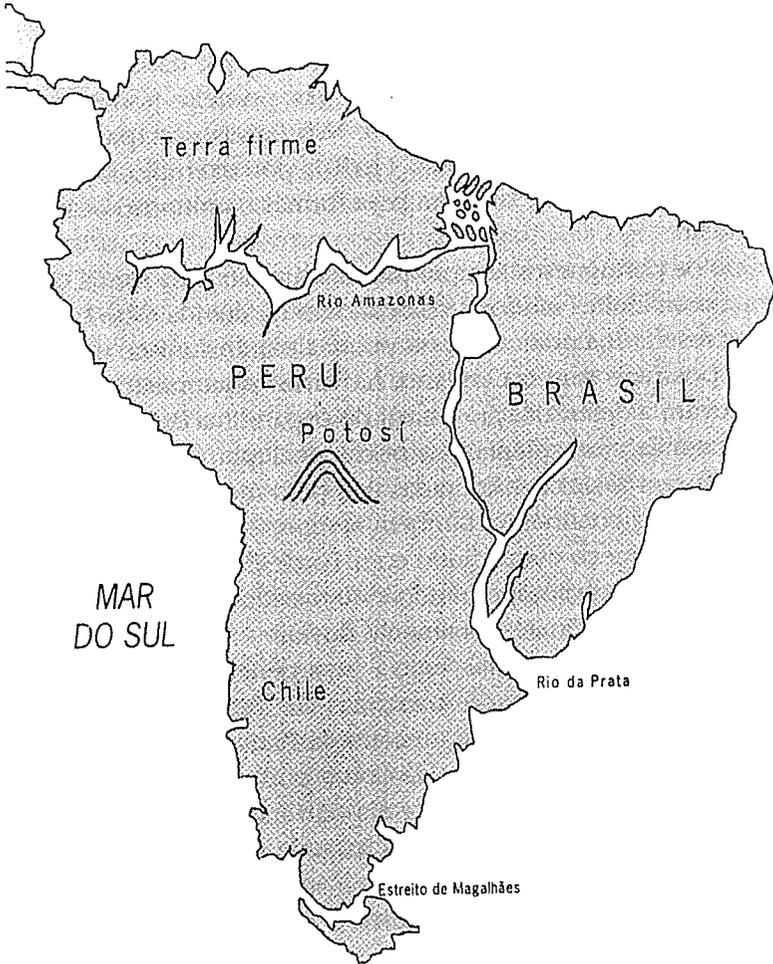
- ③⑦ *Obras de Navarrete*, II, 611-614.
- ③⑧ *Obras de Navarrete*, III, 251-252; Lourdes Diaz-Trechuelo, "Las expediciones al área de la Especificia", *Historia General de España y America*, VII, Madrid, 1982, 325-329.
- ③⑨ *Obras de Navarrete*, III, 253-279; V.M. Godinho, *Os descobrimentos e a economia mundial*, III, 139-145, 153-154.
- ④⑩ *Corpus Documental de Tratado de Tordesillas*, 304-314.
- ④⑪ W.H. Scott, *Cracks in the Parchment Curtain and Other Essays in Philippine History*, Quezon City, 1982, 57.
- ④⑫ *Colección de documentos inéditos de América y Oceanía*, 5, Madrid, 1866, 140-141.

四 南米の分界と占有

最後に南アメリカにおける分界の行方を展望し、結びに代えたい。

排他的分配の枠組みは同君連合期(一五八〇〜一六四〇年)も保持されたが、南米の経済的価値が相対的に高まったため、分界の議論の的はアジアから南米、とりわけラ・プラタ流域へ移った。ポルトガルはブラジルの南限をラ・プラタ川右岸まで押し広げる野心を持っており、「自然国境」説のダイナミックな変種ともいうべき「ブラジル島」説を主張した。これは、南米の二つの大河が奥地の大湖でつながっており、ブラジルは長大な水系によってスペイン領アメリカから分離された領域的実体をなす、という政治地理である(図3)。ブラジル島の概念はフランス国王に仕えたポルトガル人航海士ジョアン・アフォンソが一五二八〜四三年頃はじめて表明した。ヨーロッパの地図作成への影響力という点で重要なのは、バルトロメウ・ヴェリヨのアメリカ図(フィレンツェ美術アカデミー所蔵、一五六一年)である。アマゾン水系とラ・プラタ水系が大湖「エウバナ」で連結されており、ブラジル島の外縁は分界線に寄り添うような自然国境を示している。①

再独立後のポルトガルはペルー副王領との銀貿易をもくろみ、かつスペイン・イエズス会の教化村の拡大を阻むため、ラ・プラタ流域に戦略的拠点を求めた。一六八〇年一〜二月ラ・プラタ川右岸にコロニア・ド・サクラメントが建設されたのである。スペインとの間に緊張が高まった。外交的解決を図りたい両国の代表たちは、一六八一年一二月一〜八二年一



〔図3〕 ジョアン・ティシェイラ・アルベルナス図（1640年）の「ブラジル島」
(S.S. Goes, Filho, *Navegantes, Bandeirantes, Diplomatas*, São Paulo, 1999, 119)

月、バダホス・エルヴァスに集いトルデシリヤス条約の分界に立ちもどって延々と議論したが、成果はえられなかった。^③一七世紀末ミナス・ジェライスにおける金の発見はポルトガル領ブラジルの拡大を促進した。分界の合意は意味を持たなくなったように見える。地図上の自然国境は分界線からいちじるしく乖離した。トルデシリヤス条約は一七五〇年のマドリード条約で破棄されたが、それは、分界線を西に大きく乗り越えたブラジルの「実効占拠」が認められ、占有保護を意味するローマ法の「ウティ・ポシデティス」の原則が適用されたからだ、というのが通説であろう。^④ 実際、踏み越えて得られた領土は現ブラジル領全体のおよそ三分の二を占める。

しかしながら、スペインがラ・プラタ右岸の確保のために払った代償はあまりにも大きい。スペイン譲歩とみえる合意の理由として二点をあげておきたい。ひとつはグローバルな相殺である。マドリード条約の第二条でポルトガルはフィリピン諸島とその近隣への権利主張を放棄し、第三条でスペインはアマゾン流域とマトグロソンをポルトガル領と認めた。^⑤

もうひとつ、それ以上に重要なのは占有主義への警戒であろう。一七五〇年時点にたつと、新たな境界線は両国の実効的支配の空間に一致していない。アマゾン流域にせよ、中西部のマトグロソンやゴイアスにせよ、また南部のサンタカタリナなどにせよ、広大な地域が未入植のまま残されていた。フロンティア残存の現実を認めると、占有主義にたつ第三国の進出は止めようがない。警戒すべきはイギリスの介入であった。その漁夫の利を阻むために両国間で排他的な未征服地分配が再び合意されたのであって、この点で分界の精神は活かされていたのではなからうか。これは今後の課題である。

- ① Jaime Cortesão, *A Fundação de São Paulo, Capital Geográfica do Brasil*, Rio de Janeiro, 1955, 66-74.
- ② P.M.C., II, 95-97, Pl. 202.
- ③ Rumeu de Armas, *El Tratado de Tordesillas*, 241-48.
- ④ M. Lucena Salmoral, "Las repercusiones del Tratado de Tordesillas en la Época Contemporánea", *El Tratado de Tordesillas y su*
- ⑤ *época*, III, 1715. 山田睦男「植民地時代のブラジル」増田義郎編『ラテン・アメリカ史Ⅱ』山川出版社、二〇〇〇年、一五七頁。
- ⑥ M. Lucena Giraldo, "El Tratado de Límites de 1750 desde la perspectiva española", *El Tratado de Tordesillas y su época*, III, 1619-20.

The Intended Partition of Frontiers from the *Reconquista*
to the *Demarcación*

by

GODA Masafumi

The modern English “demarcation,” meaning to mark out border lines, derives from the Castilian *Demarcación* and the Portuguese *Demarcação*, connoting the partition of the world in the early modern age. The Spanish and Portuguese maritime empires had shared a geopolitical discourse on the Demarcation in order to justify their conquest and division of the non-Christian world that had not yet been claimed by any Christian prince. The discourse originated in certain treaties between the Christian monarchies on the Iberian Peninsula. In chief, Castile and Aragon had staked out two spheres of prospective conquest in Al-Andalus and Mauritania from the middle of the 12th century to the early 14th century. The *Reconquista* was presumed to be justified by the ideal of recovering the Visigothic domains from Muslims rule.

But when the Portuguese reconnoitered along the West African coast and the Atlantic Islands in the first half of the 15th century, exceeding the limits of such a recovery of lost lands, their expansion needed to be authorized and sanctioned by the ideal of ‘discovery,’ and the Papal bulls granting them such privilege. The Spaniards (Castilians) caught up with the Portuguese by virtue of the Columbian voyages of discovery and the bulls of Pope Alexander IV. The two nations negotiated to align their own spheres of future conquest. The Treaty of Tordesillas was signed in July 7, 1494, to make the Demarcation a partition of the world.

This meant, at least on paper, that the two great frontiers spread out from the Line of Demarcation in the Atlantic to the east and to the west. From the 1510s onward, however, another interpretation of the Line of Demarcation had emerged. According to this interpretation, the Line of Demarcation extended to the other hemisphere as the ‘Ante-Meridian,’ bisecting the globe. It was the Spanish voyage conducted by the Portuguese *fidalgo* Ferdinand Magellan that forced both the monarchies to recognize the Ante-Meridian as a diplomatic convenience. Magellan’s astronomer had measured and logged the geographical coordinates, latitudes and longitudes of the points they reached during the great voyage. This ironically resulted in confirming an interpretation unfavorable to the Spanish claim on the

Moluccas Islands and the Philippines discovered by Magellan, but important data seems to have been manipulated.

After the circumnavigation of the *Victoria*, the serious issue of the dominion over the Moluccas Islands arose between the two nations. Legal experts, scholars, and navigators commissioned by the Spanish and Portuguese crowns met at the border cities of Badajoz-Elvas in April to May 1524 to discuss how and where the line of Ante-Demarcation should be located in Asia, and which monarchy had the right to dominate or possess the Moluccas Islands. They were unable to resolve these issues. But both monarchies maintained the discourse on the Demarcation to keep other European powers out of their spheres of influence and to stand against the idea of effective occupation until the latter half of 18th century.

The Northwestern Border of Early Modern Japan

by

IKEUCHI Satoshi

Through an analysis of the formation of the Genroku-era prohibition against voyaging to Takeshima, the realities of the usage of Matsushima (Takeshima/Dokto) in the early-modern times, the experiences of voyagers, gazetteers and maps, it is clear that Matsushima (Takeshima/Dokto) lay outside the territory of Japan during the Edo period. On the other hand, it is difficult to recognize the claim of An Yong-bok that Matsushima (Takeshima/Dokto) was Joseon territory as historical fact, and there is no evidence that the Joseon government made anything of the claim. Therefore, it is impossible to argue that Matsushima (Takeshima/Dokto) was included *within the territory of the Joseon dynasty on the basis of An Yong-bok's statement*. Matsushima (Takeshima/Dokto) also lay outside the territorial limits of the Joseon government. The northwestern boundary of Japan was the Oki islands and the eastern boundary of Joseon was Ullungdo. Takeshima/Dokto, which lies between these two, lay outside the territorial claims of both governments.